

砂

丘

澤野久雄

東方社版

砂

丘

砂丘目次

追 隠 女 宣 執 昏 旅 宿 帰
 悪 い た れ の 先
 奴 跡 て ち 言 着 迷 で 灯 郷
 5 18 31 44 57 70 83 95 108 122

ある目醒め	135
手ちがい	148
逆説	161
雨の夜に	174
波	187
谷間	200
真実のありか	212
砕く	225
ささやかな祝杯	239
休止符	252
夜行列車	265

函写真・著者
装釘・岩本常雄

悪い奴

一

「みすず洋品店」というネオンはついてしたが、一般的な洋品雜貨を売る店ではない。間口一間、奥行二間半、左の壁によせて長いガラスケースを置いて、ブローチにネックレス、ハンカチに髪飾り、右の壁は全面を棚にして、外国製のコムバクトや化粧品がならんでいた。

女の服だつて、この店に飾られることはある。夏ならば純白の麻地に、こまかな刺繡（ヒョウ）をほどこしたジュニア・スタイル。多分、知り合いの無名のデザイナーの作品を、置いてあげる、という顔で預かるのだらう。だから、正札はつかなかった。買いたいという娘が現れば、この店の女主人は、その時になつて値段を考えるのかもしれない。

井口継郎がその店先に足を止めたのは、七月末のある暑い夕方だつた。陽はおちたが、熱気は去つていなかった。舗道（ポード）は、真昼の気配を残したまま、いくらかふくれ上つているように見えた。

彼は、かすかなためらいを感じていた。何かが彼の背を、おさえているようだつた。けれども、約束がある。うつとうしいものを、ふり払うように頸（くび）をふつて、彼は店の中にふみ込んで行つた。

「いらつしやいませ。」

二十を、一つ二つ越えたかと思える女が二人、彼に向つていつせいに挨拶をした。

「やあ……。」

井口の目には、含羞^{はにかみ}がながれた。場ちがいな所にいると、自覚^{じかく}した男の表情だつた。

「村木さんは……?」

「ああ、ママに御用事?」

と、一人の女が言つた。無難作^{むなんさく}にというよりは気易げに、

「生憎、そこまで出ておりますが……。」

「さつき、電話をもらつたんです。寄つてくれと、言われたんです。」

「あら。じゃ、どうぞ。」

白いブラウスの女は、右手を拡げるようにして、彼を招^{しょう}じた。店の一番奥に、ソーファが置かれていた。小さな卓子に大判の雑誌がつみ上げられている。ソーファの坐り心地は、よさそうではなかつた。女の匂いがこもるような店である。僅かに、気持も重くなつた。

——その迎^{むか}ひを、散歩して来ようか?

彼はまた、ふり返つて通りを見た。

駿河台下から三省堂の裏に入つて、神保町の停留所ぎわに出る斜めの道は、漸^{ようや}く生氣をとりもどそうとしていた。アヴェニックが、幾組も通る。男の手に、ぶら下るようになった少女、肩をすりつけて歩いている恋人たち。

——暑いのに……。

と思うと、それらの人の中にまじつて、歩いて見る気にもなれない。

「どうぞ。冷いものでも、おいれしますわ。」

愛想がよかつた。親切だつた。しかし彼は親切な女の顔を、つまらなそうに見返した。それからようやく思いきめたように、細長い店をぬけて、ソーファまで行つた。

「すぐに帰つて参りますから……。」

一人の女は、冷たいジュースを運んで来た。夜は戸を閉して、留守居も残さない店だと聞いているが、電気冷蔵庫ぐらゐは置いてあるのだろう。白い扇風機が、彼の目の前で、音もなくまわりはじめた。

それは、退屈な時間だつた。

ファッション・ブックを開いて見たが、彼の興味をそそる記事はなかつた。するとつい、店に入つて来る人に目を注ぐことになる。

一人の少女は、リボンを買つて歸つた。三人連れの女は、さんざんブローチを出させて見た^{あけて}揚句、

「いいの、ないわね。」

そういうと、さよならも言わずに立ち去つた。

中年の女が入つて来ると、あれこれと外国製の化粧品を手にとつてながめ、匂いをかぎ、最後に安いハンカチを一枚、買つて歸つて行つた。

井口は一層、不愉快になつて来た。女だけの世界では、こういうことが普通なのだろうか。女のあ

つかまじさを、見せつけられているかのようだ。

その時である。

彼はもう少しで、あッ、と声を上げそうになった。ゆるんでいた気持が、物倦ものうい体が、不意に立ち直るようだった。

着物を着た女が、店の入口に立つて、すばやく中を覗のぞきこむのである。

——誰だろう？

たしかに見たことのある女である。二十六、七になるだろうか、和服を着ていることで、却かえつて貧しげに見える。それは裾も袖もひらひらする、いかにも安物と見える着物だった。テトロてとろンとか、ボンネルとかの混紡こんぼうであろうか。かすりの色も、地色に落ちついてはいなかった。

女は、店の中を見極めるようにして、それから肩をつぼめて入つて来た。物を買いに入つたと思われては、困るというようなあわただしさで、

「あの村木さんは……？」

女店員が留守だというと、ひどく落胆らくたんする色が見えた。

「待たせて頂いていいでしょうか？」

「ええ。」

しかし店員たちは、井口を迎えた時ほどに、愛想のいい口調ではなかった。

向い合つて坐つた女は、いくらかやつれているように見えた。ちらちらと店先に目を移す。落ちつかない様子である。

「僕も村木さんを待つているんですが、お急ぎ……?」

「はあ。」

「店の人じや、分らないんですか?」

女に声をかける氣になつたのは、女店員たちの彼女に対する応接が、妙に薄情はくじょうに見えたからだつた。

「品物を届けに來たものですから……。」

「何を?」

女は、大事そうにかかえていた風呂敷を開いた。ボール箱の中に、ネックレスとブローチがつまつていた。

「おや、問屋さん?」

「いえ。」

たしかに、おどおどしている。問屋が品物を卸おろすなら、もつと堂々としていたらいいじゃないか、と思つた時、

「お預りした仕事が出来ましたから、ひきかえにお金を頂きました……。」

「ああ、そうですか。」

しかし、まだ相手の仕事に納得がゆかない。相手は、井口の不審を察したらしく、

「これをつづる仕事なんです。」

指先で、一本のネックレスをつまんで見せた。

——ああ、そうか。

と、彼は思った。

店から、ビーズやガラス玉を預かる。それを、テグスに通し首飾りに作る。なるほど、これは女らしい仕事だ。

「しかし、いつもここまで届けるんですか？」

「いえ、いつもはお宅に持つてゆくのです。今日は急いでおりますので……。」

女は、たしかに帰りを急いでいるようだ。急いでいるから、おちつけないのかもしれない。

「店員さんじゃ、分らないのですか？」

「ええ。」

「それだけ作つて、工賃はいくら……？」

「さあ、二百円ほど……？」

「え？」

と言つた。それから、多分、一本の首飾りの工賃だろうと思ひ直した。技術もいるだろう。熟練も必要かもしれない。

首飾りは、五十本ほどあつた。ガラス玉とは言つても、美しい色を見事に組み合せている。高価なものではないと見えるが、それをつまんで見せる女の指が、かえつて白くすき透るようだ。

紅もあつた。青もあつた。黄も白も、それぞれにちがうガラス玉が、小さなビーズを間にはさんで、たがいに自分を映し合つてゐる。天井から下つた灯の下で、それは照り合いとけ合つて、不思議な色の陰影であつた。

「割に、いいお金になるものですね。」

「……？」

女が、おどろいたような顔を上げた。その目を見て、あ、やつぱり見たことのある人だ。と彼は思った。どこの誰かは知らない。そして相手も、井口を認めない。が、たしかに知つてゐる顔だ。

「これで、いい工賃でしょうか。」

「だつて、一本二百円なら……。」

「あら、全部ですわ。一日、三十円にもなりませんわ。」

今度は、井口のおどろく番だつた。

「これ、全部で……？」

「ええ、だからこうやつてゐる時間も惜しくて……。」

井口が「みずず洋品店」を出た時は、もう、七時半を過ぎていた。女主人の帰りを、それ以上、待つ気はなくなつていた。それに、ネックレスを届けに来た女のこと、怒りと憂鬱ゆううつとがおちかかつて来ていた。

「寄れと言つて、留守にするなんて、失礼だつて言つて置いて下さい。」
少女たちにそう言つて出ると、通りはもう夜だった。

——あの女も時間をむだにしたろうが、俺もつまらない時間をつぶした。

どこかで、ビールでも飲もうかと思つた。腹立たしいものが、暑さを増すようだった。電車通りに出たところで、さて、と立ち止ると、

「井口さん、待つて……。」

ふり返ると、村木千鶴だった。これは高価らしい着物に、博多の帯である。帯に合わせて選んだと思われるハンドバッグを提げていて、

「せつかちね、今日のあなた……。もう少し待つて下さればいいのに……。」

「あんな店にながいこと坐つていたら、頭がおかしくなつて来る。」

「どうして……?」

千鶴は、店に帰つて来るなり、すぐに井口を追つて出たのだろう。灯をうけた額ひたいが、かすかに汗ばんでいる。三十二、三だろうか。その年ごろの女らしい匂いが、熱気をおびて立つようだった。

首飾りを持つて来た女のこと、まだ聞く暇がなかつたのかもしれない。井口はその女に、二百何

十円かを立て替えてやつたが、千鶴はそのことには触れようもしないで、

「せつかちなばかりではないわ。あなたつて、随分いろいろとロマンスがあるつてじゃない？」

また、何を言い出すのかとふつと眉をよせて、井口は相手の目を見返した。姉の理恵の古い友達である。

「弟さんのために、いいお嫁さんをお世話するわ。」

と、いつも理恵に向つてそう言っている女だが、この人なら間違いないと、井口は須永三津子を紹介された。ふた月ほど、前のことだ。すると三津子は毎日のように、井口のつとめ先へ電話をかけて来るようになった。お茶でもおごつてと、誘い出そうとすることも少くない。が、井口は少くも気がすすまなかつた。話を進めてもらおうとはしなかつたし、自分から三津子に会おうとしたこともない。すると千鶴の方では、この縁談に一層熱心になるのだつた。

「少し、歩きましよう。」

千鶴は井口を、交叉点こうさてんの方に誘いながら、

「須永さんのお宅で、あなたのこと調べたのよ。そしたら……。」

「しらべた？」

「ええ、それは仕方がないわ。大事な娘さんを縁づけようと思つたら……。」

「……。」

「そしたらあなたの身边が、余りはなやかすぎるのじゃないかつて……。」

「頼みもしないのにお嫁さんの世話をしてくれて、頼みもしない人の生活をしらべて、それでがつかりしていれば世話はない。」

「あら、そんなことを、言つてもいいの？」

「あなた、もうお店にお帰りなさい。留守にばかりしていたら、お店がつぶれちやいますよ。」

交叉点で立ち止つて、井口はそう言つた。

「もういいのよ、お店の人に鍵をあずけて来たわ。今夜はゆつくりと、あなたをとつちめてやる。悪い人よ。本当に……。」

美しい人だ、と、うすい街灯のあかりの下で千鶴を見て、彼は今日も思うのだつた。仄かに血の色をうかべたように、白い皮膚の内側がほてつてゐる。仕事の腕もいいのだろう、とにかく結婚もせず、一軒の店を開いている女だ。しかし、少しお節介がすぎるのではないか。そんなに人の世話が好きななら、内職に首飾りを作る女の報酬でも、少し増やしてやればいい。

長いテグスに、きつちりと硝子玉を通して、金具でとめる、頭のいる仕事ではないが、一本で二十分はかかる、それで報酬は二円だと聞いた。ビーズが五本もからみ合つたネックレスでも、工賃は八円にすぎない。ひと晩四時間ずつ根をつめて仕事をするが、一日に三十円にもならないという。

そういう零細な仕事があるということを、井口は今日まで知らなかつた。彼も決して、金持ちではない。月給は二万数千円にすぎない。しかし、たとえ安物のネックレスだとは言つても、一本作つて二円とはひどすぎる。